

多党制下のカナダにおけるデュヴェルジェ的 政党政治の希求

高野 麻衣子

Presenting themselves as a country's sole and natural national government leaves brokerage parties with a deep antipathy towards coalition politics.
ローランド・K・カーティ

はじめに

旧宗主国イギリスと同様に、選挙制度として単純小選挙区制を採りながら、1920年代より多党化したカナダは、単純小選挙区制は二党制を生みやすいとするデュヴェルジェの法則からの逸脱例であると位置づけられてきた。本稿は、こうした逸脱のもとで生まれるカナダの政党政治像を、歴史と制度の両面から検討する。特定の地域を基盤とする第三党が、ときには選挙で第二党へと躍進する状況にあっても、これまでのところ、政権運営は伝統的な二政党である自由党（Liberal Party）と保守党（Conservative Party）に限られてきた。そのため、本稿においてカナダの政党政治像を検討する際には、第三党との関係を踏まえつつ、これら二政党の政治行動およびその特徴に注目する。

カナダの自由党と保守党は、その政党ラベルをイギリスから受け継いだものの、イデオロギー色は弱く、歴史的には、各時代に浮上する争点ごとに立場の違いを示してきた。したがって両党は、第一に政権獲得を目指す点で極めてプラグマティックな性格を有し、カナダの政党政治研究者ローランド・K・カーティの上記引用にあるように、あらゆる地域やそこに含まれる民族の支持を党内に取り込むことを目指す、「ブローカー（broker）」として特徴づけられてきた（Brodie and Jenson 2007：40；Carty 2015：56）。このブローカーとしての特徴は、両党が自ら主張し、またそれを受けてカナダ政党政治研究でも言及されるように（Underhill 1974：17-18）、あらゆる地域を代表するという意味での「ナショナル（national）」な政党としても表現される。

本稿は、二政党が主張してきたこの「ナショナル」という政党のあり方に着目し、多党制のもとで生まれるカナダの政党政治像について、以下の見方を独自に提示する。それとはすなわち、特定の地域を基盤とする第三党の出現により、地域間で政治的な亀裂が生まれている状況にあっても、「ナショナル」な政治主体であることを主張し追求する、デュヴェルジェ

の政党政治の希求である。つまり、「ナショナル」であることを、政権を担う政党の真っ当なあり方とすることによって、第三党が政権の運営主体になることを排除し、究極的には、二大政党間の対立に特徴づけられるデュヴェルジェ的政党政治への回帰を目指す姿勢としてとらえられるのではないかと考える。

1. 問題提起と検討の枠組み

まず政党制について見た場合、今日のカナダでは社会的な多元性や諸利益の地域的な凝集性を反映し、自由党と保守党の伝統的な二政党に加えて、社会民主主義系の新民主党 (New Democratic Party 1961年～)、環境問題に関心をもち草の根民主主義を唱える緑の党 (Green Party 1983年～)、ケベック州の主権を唱えるケベック連合 (Bloc Québécois 1991～) が、常時連邦選挙を戦う実質的な五党制となっている。20世紀以降は、多党化や、党首選の導入による政党の民主化といった、政党システム・政党組織両面での変化が見られたが⁽¹⁾、伝統的な二政党と第三党の勢力バランスを見た場合には、前者が支配的であることに変わりはない。

しかし、そこに大きな変化をもたらしたのは、1993年の連邦選挙であった。財政や憲法改正の問題から、当時、政権を担っていた進歩保守党 (Progressive Conservative Party) (現保守党) が二議席となって第五党へと転落し、西部とケベック州のそれぞれを基盤に出現した第三党が、有権者の不満のはげ口となって議席を大きく伸ばしたためである⁽²⁾。この傾向は、進歩保守党が、上記西部の第三党を引き継ぐ形で形成された右派政党と合併し、当初の保守党の名を再び掲げて候補者を擁立した2004年の連邦選挙まで継続的に見られた。1993年以降のこうした変化は、1920年代に始まった多党化に加えて、第三党が野党の首位を連続的に占めるようになった点で、デュヴェルジェの法則からの逸脱をさらに強めるものとなったのである。以降、カナダの政党政治研究では、この変化の側面に関心が向けられ、政党システムや政党組織、政党の代表機能、選挙運動の手法といった観点から、第三党を含めた政党政治一般の変化が説明されてきた (Carty, Cross, and Young 2002 : 15-36 ; Patten 2007 : 70-76 ; LeDuc 2007 : 163-177)。

その一方で、第三党の興隆に伴う地域的な亀裂の政治化により、伝統的な二政党もその本質的な特徴を変化させたのかという点には、時代横断的な体系だった説明がなされてこなかった。しかしこの点は、今日のカナダ政党政治の理解のみならず、政党政治にもとづくデモクラシーのあり方を考える上でも重要である。上述のように両党は、歴史的に極めてプラグマティックかつ、ブローカーとしての性格を有してきた。それには、カナダが19世紀半ばの国家形成当初より潜在的な地域間・民族間対立を抱えていたという事情があった。政党は、国内の均衡維持のためにも、政治的志向性を薄めておく方がよしとされたのである (Siegfried 1992 : 19-20)。したがってカナダの自由党と保守党は、常に「国家の統合 (national unity)」

を政治課題として掲げ、国内の地域的亀裂を党内に吸収することに、政党の存在意義を見出してきた。この点で両党は、社会的・経済的な亀裂を既成事実として自明視した上で、選挙においてできるだけ多くの支持を得ようとする他国の包括政党とは性格を異にすると理解されてきた (Carty and Cross 2010 : 195)。以上を踏まえるならば、今日のカナダ政党政治像を描き出そうとする本稿においては、特定の地域に支持基盤をもつ第三党の躍進を見た1993年の連邦選挙の前後で、伝統的な二政党の特徴に変化が生じたのか否かを問う必要がある。

本稿ではこの問題について、保守党に関しては判断の留保とより長期的な検討が必要になるものの⁽³⁾、少なくとも自由党はその本質的な特徴の面で歴史的な継続性を帯びており、それはとくに、第三党との関係を見る上で重要な、連立政権に対する同党の姿勢に見られる点を指摘する。また、そこから浮かび上がるカナダの政党政治像とは、自由党と保守党が「ナショナル」であることをめぐり政治的に争う中で、特定の地域を代表する第三党が政治の運営主体としての地位を確立することを阻みつつ、二大政党間の対立にもとづくデュヴェルジェ的政党政治への回帰を求める姿勢である。最後に、多党制下での、このデュヴェルジェ的政党政治の継続的な希求から生まれるデモクラシーの形態は、アレンド・レイプハルトの研究においてカナダが政府・政党次元で分類されている多数決型、すなわち、国内の相対多数派の利益が優先されやすい仕組みにもとづく民主主義というよりも、国内利益の規模の最大化を促すコンセンサス型の民主主義に近いものになりうる点を示唆する。

2. カナダにおける政党政治の史的展開とその意義

カナダの政党政治の本質的な特徴を理解するには、19世紀半ばの責任政府 (Responsible Government)、いわゆる議院内閣制の成立期に遡って検討する必要がある。なぜなら、責任政府の成立が、特権的なイギリス系の保守派 (王党派) によるそれまでの寡頭政治を廃し、保守派と、フランス系を含む一般的な植民地人を代表する改革派との間での、競争にもとづく政党政治 (party government) を生み出したためである (Smith 1985 : 5)⁽⁴⁾。つまり、責任政府の成立の仕方が、その後のカナダの政党のあり方と、政党政治の意義づけに影響を及ぼしたと考えられるのである。

まず、1848年に責任政府が成立する以前のカナダは、いまだイギリスの植民地下にあり、今日のオンタリオ州とケベック州にあたる各行政地域には、形式的には本国と同様の、内閣、上院、下院といった議院内閣制の構成機関が置かれていた。しかしその運用実態は、内閣が議会に責任を負うものではなく、下院には公選制が適用されていたものの、国民の代表機関としてのその実質的な影響力は形骸化していた。それというのも、王党派の系譜をひく少数のイギリス系富裕層、すなわち保守派が、本国から派遣された植民地総督と手を結び、内閣や、任命制の上院といった政府の要職を牛耳っていたためである。

責任政府を求める動きは、今日のオンタリオ州にあたる地域のイギリス系改革派と、ケベック州にあたる地域のフランス系改革派の協力関係のもとで生み出された。19世紀前半のオンタリオでは、一般の植民地人の多くは農民であり、彼らは、王党派の子孫や新たに到来したイギリス系移民の保守派による寡頭政治に不満を抱いていた。また、ケベックでは多数派のフランス系住民が、内閣と上院の権限を独占する少数派のイギリス系王党派と、彼らと結びついたモンリオールのイギリス系商人の寡頭制下に置かれていた。そうした中、両地域の急進的な改革派が、保守派の寡頭制から責任政府への転換を求めて反乱を起こしたのである。

この反乱は後に鎮圧されることとなったが、本国に植民地問題への対処の必要性を意識させた点では重要な意味を持った。実際に、反乱後はイギリスホイッグ党のダラム総督がカナダ植民地に赴き、現地の実態を踏まえた報告書を作成した。イギリスはそこで示された政治改革の勧告にもとづき、統治の効率化を目的として、1841年にオンタリオとケベックを政治的に統合した。そこに新設された連合カナダ政府のもとで、イギリス系とフランス系の穏健な改革派が次第に勢力を増し、1848年の選挙で保守派に圧勝したことにより、内閣が議会に真に責任を負う政府が樹立されたのである。

責任政府の成立に関して重要なのは、その成立の仕方が、二つの党派（後に政党）のあり方と、政党政治に特別な意義を付与した点である。すなわち、責任政府の運営は、二つの党派のそれぞれが、それまでイギリス系保守派が代表していたような偏狭な利益ではなく、普遍的な利益を代表し相争うことにより保障されることが、ここに確認されたのである。保守派に対する改革派の反乱により導かれたという、カナダの責任政府の成立過程は、植民地内の党派対立とそれに付随する反乱によってではなく、植民地の要求を受け、本国が移譲する形で達成されたオーストラリアの責任政府の成立過程とは異なっていた（Hirst 2002：26-32；Woollacott 2015：99）。つまりカナダにおいては、この19世紀半ばの時点で、党派、後の政党が、責任政府の運営を保障する主体として、地域や民族の違いを超えた普遍的な、いわば「ナショナル」な利益の代表者となることに積極的な意味合いが付与されたのである。

このように「ナショナル」な代表であることを掲げ、あらゆる地域やそこに含まれる民族に訴えるカナダの二政党のこうした特徴は、1867年の連邦結成後も、広大な国土に広がる多様な地域や民族を結びつける、すなわち、「国家の統合（national unity）」主体としての役割を新たに掲げて、その後も維持されてゆくこととなった。

3. カナダ政党政治の理論的枠組み

これまで見てきたように、歴史的にカナダの二政党は、特定のイデオロギーや社会・経済的な諸利益を結集核として有してきたわけではなく、もともと、政党の支持基盤も流動的であった。そのため、カナダにおける政党政治の歴史的な変遷は、アメリカ合衆国のように選挙を軸とした政党再編成、すなわち、国論を割る新たな争点の浮上に伴う政党支持基盤の流

動化という観点からは説明できない。また、カナダでは国家形成以来、1993年の連邦選挙にいたるまでの間、多党制下にあっても自由党と保守党の二政党が支配的であり続けたことから、西ヨーロッパの政党政治の変容を示す政党数やイデオロギー的距離、政党間競争のあり方といった観点で説明することも難しい (Carty, Cross, and Young 2002: 15)。そこでカナダでは、デイヴィッド・E・スミスとローランド・K・カーティ、ウィリアム・クロス、リサ・ヤングに代表される政党政治研究者によって、カナダ政治特有の理論的枠組みが示されてきた。ここでは、テレビや世論調査の普及といった、政党の外側で生じた一般的な変化に加えて、とりわけ政党の代表機能、すなわち、自由党と保守党が、各時代に浮上した社会・経済的な問題を背景として現れた地域間の亀裂をいかに吸収し得たのか、という観点から政党政治の歴史的変遷が説明されてきた。

スミスとカーティは、1993年までの政党政治を三つの時代に区分している。国家形成の1867年から1910年代までを第一次政党制とし、この時代の政党政治を、政権与党によるパトロネジの分配として特徴づけている。パトロネジの分配は、連邦結成後、最初に政権を担った保守党が、あらゆる地域の支持を党内に取り込む手段として始め、その後に政権を担った自由党もこの手法を踏襲した。第一次政党制の時代には、保守党も自由党も、何よりもまず国家全体を経済的に繁栄させることを政治的な課題として掲げ⁽⁵⁾、イデオロギーや特定の社会・経済的志向性ではなく、パトロネジの分配によって広範な支持を獲得し、「ナショナル」な党としての地位を固めていったのである。

1920年代に入ると、産業化と都市化の進む中央カナダ (オンタリオ州とケベック州) と、農業を主な経済基盤とする西部諸州との間で経済格差が広がり、地域的な亀裂が顕在化した。以降、西部では、農民や労働者の利益を代表する第三党が続けて出現した。このように、国内の亀裂が浮上した1920年代から1950年代までが、第二次政党制の時代として区分されている。1950年代半ばまでは自由党の優位が続いたものの、1921年には多党化が始まり、以降、デュヴェルジェの法則からの逸脱が常態化することとなった。20世紀初頭には公務員制度改革が実施され、それまで政権政党にとっての最大のリソースとなっていたパトロネジは削減された。しかし、第二次政党制の時代に政権を担い続けたマッケンジー・キングの自由党は、各地域を代表する議員を、それぞれの代表地域が特別な利害関心を持つ省の大臣職に就かせ、それによって国内の地域的な亀裂の吸収と支持基盤の拡大を目指した。つまり、この地域代表大臣 (regional minister) に州と連邦の仲介役 (broker) を担わせる手法を採ったのである⁽⁶⁾。

続く第三次政党制の時代、すなわち1960年代から1990年代までは、メディアや世論調査の普及が各党の選挙戦に影響を及ぼした。政党がパトロネジや地域代表大臣を介して政党内に広範な地域の支持を取り込むというそれまでの手法が、政党、特に党首が、メディアや世論調査を活用し、各州の有権者に直接訴える手法へと変化した。こうした、政党の外側における一般的な変化も合わさり、1980年代にはブライアン・マルルーニーの進歩保守党 (1984

年～)が、前自由党政権下のエネルギー政策や憲法問題に対する西部諸州とケベック州の不満をうまく吸収する形で、自由党の長期政権に終止符を打った。しかし、財政や憲法改正の問題から、1990年代に向かうにつれて、西部諸州やケベック州の地域的な亀裂が再び顕在化し、これらの地域を基盤とする第三党が形成されることとなった。自由党と進歩保守党は、従来通り選挙であらゆる地域に訴える手法を採ったものの、地域的な亀裂の吸収にはいたらず、1993年の選挙では第三党の躍進を招くこととなった。

以上のように、カナダの政党政治の歴史的な変遷は、伝統的な二政党の代表機能、すなわち、時代ごとに浮上する国内の亀裂にいかに対応してきたかという点について、その手法と、対応の可否という観点から区分されてきた。ただし、次章で扱う1993年の連邦選挙以降の政党政治との関係で本稿が注目するのは、これら三つの区分における政党政治の共通性である。自由党と保守党は、党内であらゆる地域やそこに含まれる民族を代表させようとしてきた点では時代を超えて共通していた。つまり、1920年代以降、地域的な亀裂が政治化し、多党制が常態化した状況にあっても、あらゆる地域や民族に訴えて代表しようとする、「ナショナル」な政治主体であることを継続的に掲げ、両者はそれをめぐって争ってきたのである。

では、特定の地域を基盤とする第三党が連続して野党の首位を占め、自由党と保守党が現実的には地域間の亀裂を吸収しきれなくなった1993年以降、カナダの政党政治にいかなる変化が生じたのかを以下で検討する。

4. 1993年連邦選挙以降の政党政治とその変容

1) 政党システムと政党組織

1993年の連邦選挙はカナダの政党政治に大きな変化をもたらし、その傾向は、続く1997年の連邦選挙以降も確認された(Carty, Cross and Young 2002: 15)⁽⁷⁾。そのため、カナダの政党政治研究は、1990年代以降を第四次政党制として区分している。この時代には、ケベック州と西部地域のそれぞれで生み出された第三党、すなわち、ケベック連合(Bloc Québécois)と改革党(Reform Party)が勢いを増し、選挙の結果、第一党となった自由党に次いで、第二党と第三党の地位を獲得した。特定の地域を基盤とするこれら第三党の台頭は、1980年代にカナダ全域での広範な支持に支えられて誕生したマルルーニー進歩保守党政権下で、財政の悪化や、ケベック州を懐柔する目的で進められた憲法改正の頓挫、また、そうしたケベック懐柔策に対する西部諸州の不満が相まって生じたものである。その結果、進歩保守党は、1993年、1997年の連邦選挙で続けて第五党となり、また、この間に政権に就いた自由党でさえも、選挙における支持がオンタリオ州といった特定の地域に偏る傾向が見られた。先行研究ではこれを、「地域的に分断化された政党システム(regionalization of party system)」(Carty, Cross and Young 2002: 16)と呼んでいる。

第四次政党制では、政党システムにおけるこうした変化に加えて、政党組織の面でも新た

な変化が生まれた。これは、1990年代以降に顕在化した、政治的リーダーや政党、政治制度の責任性 (responsibility) に対する有権者の不満の高まりを受けたものであった。実際に、伝統的な二政党に対する有権者の不満のはけ口となった改革党、またそれに続く形で保守党も、政党組織の民主化を推し進めた。具体的には、党大会や郵送票を通じて、有権者の声を党の重要な決定により反映させる仕組みへと変更した (Carty, Cross and Young 2002 : 23-24)。また、1990年代以降は、自由党も保守党も、有権者との契約となるマニフェストを選挙の際に作成するようになった。こうした変化は、カナダにおける議会外の政党組織の伝統的なあり方を転換させるものとなった。それというのも、議会外の政党組織は、支持者を動員する形で選挙ごとに組織される一時的なものであり、カナダ政党政治の伝統においては、恒常的な「党員 (party member)」の概念がそもそも不在だったからである (Carty, Cross and Young 2002 : 23)。

2) 「ナショナル」な党としてのあり方

このように、近年のカナダ政党政治研究では、政党システムと政党組織の両面における変化に関心が向けられてきた。また同時に、「地域的に分断化された政党システム」の概念に示されるように、自由党と保守党が国内の地域的な亀裂を吸収しきれなくなっている現状も繰り返し指摘されている。ただし、ここで区別を要するのは、これら二政党があらゆる地域やそこに含まれる民族を引き続き党内で代表できているかどうか、すなわち、実際に「ナショナル」な政党であり続けているかどうかを問う先行研究の議論と、1990年代以降、特定の地域を代表する第三党が継続的に野党の首位を占めるようになったことにより、二政党は「ナショナル」な政党としてのあり方そのものを変化させたのか、あるいはそれを余儀なくされたのかという、本稿が問う議論である。後者は、今日のカナダ政党政治の本質的な特徴やそれにもとづくデモクラシーのあり方を理解する上で重要であり、長期的な検討を要すると考える。

「ナショナル」な代表についての二政党の姿勢は、第三党との連立形成に対する言動から浮かび上がる。カナダでは、多党化が始まった1920年代に、特定の地域を代表する第三党との連立をめぐる議論が早くも浮上していた。その際、第三党との連立交渉の対象となったのは、反保守党の立場を共にする自由党であった。しかし自由党は、あらゆる地域を代表する「ナショナル」な政党が、単独で政権を構成することを、責任政府を運営する政治主体の真っ当なあり方であるとして、第三党との連立形成を断固拒否した。自由党は、党内にあらゆる地域の支持を吸収し、それを閣僚人事にも反映させることにより、カナダの政党政治を従来の二大政党制に回帰させられると考えていたのである⁽⁸⁾。

カナダと同じく旧宗主国イギリス型の議会政治の伝統をもつオーストラリアでは、同じく1920年代に多党化して早くも連立政権が誕生しているが、カナダでは今日にいたるまで、連立政権は一度も構成されていない⁽⁹⁾。そのため、1921年以降に誕生した30の政権のうち

の13の政権は、自由党あるいは保守党による単独少数派政権であった。これら13の政権の存続期間はいずれも2年以内と短命である。それにもかかわらず、なぜ連立よりも少数派政権が一貫して選択されてきたのかという点は、カナダではむしろ後者が規範であるがゆえに問われてこなかったのではないかと考えられる。

少数派政権の選択や効率的な運営を可能にする条件として、カーレ・ストレームの研究では、例えば、政策決定での野党議員の関与を高める委員会の影響力といった、北欧諸国の制度的な特徴が挙げられているが、カナダの議会政治がそうした特徴を必ずしも共有しているわけではない上に (Strøm 1990: 70-73)、連立を否定しているのは第一党である。この点は自由党も保守党も同様である。カナダにおけるこうした選択は、二大政党制を規範としてきたイギリス議会政治の伝統に依拠した結果ということは考えられるが、早くも1920年代に連立政権へと動いたオーストラリアの事例を踏まえるならば、カナダの政権選択についてはまた別の説明が必要になろう。この点、1920年代の連立形成をめぐる議論での上記自由党の姿勢に見られるように、「ナショナル」な政治主体としての自己正当化が、カナダの政権選択に影響し、それによって二政党は、特定の地域を代表する第三党が政治の運営主体となることを阻んできたといえる (高野 2015)。

では、第三党が野党の首位を占め、政党システムが地域的に分断化された1990年代以降、伝統的な二政党のこのようなあり方が変更を余儀なくされたのかどうかを、連立問題が再度浮上した2015年の連邦選挙を対象に以下で検討する。

3) 2015年連邦選挙と連立問題

連立問題は、2015年10月19日に実施された連邦選挙においても浮上した。この選挙では、結果としてジャスティン・トルドーの自由党が勝利し、2006年以降政権を担い続けてきたスティーヴン・ハーパーの保守党は野党へと転じた。しかし、選挙運動期間中の予測では、いずれの党も単独では過半数の議席を得られないと見られていた。それというのも、第三党として1960年代に出現した社会民主主義系の新民主党が、自由党の牙城であったケベック州でも近年高い支持を得るようになっていたためである。2015年の選挙では、同党が第一党になるとの見方すらなされていた。そうした状況下、政権獲得を目指す自由党が、新民主党と票を奪い合った場合には、結果的に保守党を利することになると連日メディアで報じられた。また、この選挙では石油価格の急落に伴うカナダ経済の立て直し策が主な争点となっていたが、選挙運動期間中には、シリア難民の受け入れをめぐる議論も急浮上し⁽¹⁰⁾、各党の立ち位置や選挙結果の予測をより難しくした。

ただし、低迷する経済への不満により、有権者の意向がおおむね政権交代に傾いていたのは明らかであった。そのため、メディアの関心は、ハーパー保守党政権打倒を掲げる自由党と新民主党の連立問題に向けられた。新民主党の側では、党内から連立を求める声が挙がり、党首のトーマス・マルケアも、自由党との連立交渉に前向きな姿勢を公に示していた。しか

し、自由党の党首トルドーは、政権交代を最優先課題としながら連立に動かないのは危険な選択であるとのメディアの批判を受けながらも、選挙運動の早い段階で連立の可能性を否定していた⁽¹¹⁾。それには、均衡財政の立場をとる新民民主党に対し、赤字財政へと舵を切った自由党の政策的な違いもあったが、ここでもやはり、政権運営を担う主体としての「ナショナル」な党という点にトルドーが言及していたのは本稿との関係で重要である。彼は選挙運動の終盤に、「とくに自由党にとって、真にナショナルな党になるにはあらゆる地域の支持を得る必要がある（傍点筆者）」⁽¹²⁾と述べている。また、彼は政権運営に関して、「自由党はカナダ人のニーズに合うような法律をつくるために議会でいつでも野党と協力する」⁽¹³⁾とも表明している。つまり、トルドーは少数派政権になる可能性も十分に認識した上で、政策決定の際には多様な意見を取り込み、そこでの妥協によって政権を動かす意向であったといえる。選挙での勝利の後、「私は全カナダ人の首相になる」と約束したように、彼が目指していたのは、地域的に分断化されたそれまでの政党政治の克服⁽¹⁴⁾、すなわち、「ナショナル」な党の実現と、それにもとづく政権の樹立だったのである。選挙での勝利の後、トルドーは実際に地域のバランスに配慮した閣僚人事を行い⁽¹⁵⁾、「ナショナル」な党としての性格を政府にも反映させている。

5. 政党政治の歴史的・制度的検討

2015年の連邦選挙においてトルドーの自由党は、前回の選挙で新民民主党に奪われていたケベック州の支持基盤を回復し、結果的には圧勝を取めた。ただし、西部のサスカチュワン州では14議席のうちの1議席、アルバータ州では34議席のうちの4議席を獲得するにとどまり、両地域の支持を保守党から奪還することはかなわなかった⁽¹⁶⁾。

既述のとおり、カナダでは1920年代以降に特定の地域を代表する第三党が出現し、多党制が常態化した。また、1993年の連邦選挙以降は、政党政治の地域的な分断化が顕著になった。そうした中、カナダの自由党と保守党は、「ナショナル」な政党であることに実質的な限界を抱えざるを得なかった。それにもかかわらず、両党が「ナショナル」であることを継続的に主張しうる根拠はどこにあるのか、また、それへの回帰は実際に目指しうるのだろうか。本稿はこの問題について、カナダにおける政党政治の歴史的な側面と、政党組織の制度的な側面に注目して検討する。

まず、政党政治の歴史的な発展を考えた場合、既に検討したとおり、カナダの政党政治は19世紀半ばの責任政府の実現とともに成立した。かつて保守派が代表していた偏狭な利益ではなく、広範な、いわば「ナショナル」な利益を代表する二政党が争うことによって責任政府の運営が保障されることが、この時代に確認されたのである。また、「ナショナル」な利益を代表する上で、地域や民族の違いを超えた同盟にもとづく政治という考え方が、責任政府の達成を主導した改革派、すなわち、今日のオンタリオ州にあたる地域のイギリス系の

政治家ロバート・ボールドウィンと、ケベック州にあたる地域のフランス系の政治家ルイ＝イポリート・ラフォンテーヌを中心に見られた⁽¹⁷⁾。イギリス系にとっては、責任政府の達成、フランス系にとっては、公選制の下院を機能させる責任政府のもとでの、北米での民族的生き残りという目的が互いに合わさり（Cross 2012：41）、党派（後の政党）を「ナショナル」なものにする、すなわち、そこに異なる地域や民族を包摂するというアイデアが、この時代に生まれていたのである⁽¹⁸⁾。

この点は、19世紀半ばに本国イギリスが、フランス系社会をイギリス系社会に同化させる目的で、今日のオンタリオとケベックを政治的に統合したことを踏まえるならば重要である。実際には、そうしたイギリスの目論見に反して、イギリス系とフランス系の協力関係が植民地の内側から生み出されたからである（細川 2014：49-50）。このように、異なる地域や民族を党内に包摂するというアイデアは、今日のカナダの国民統合にも連なる、「包摂的な社会（an inclusive society）」の考え方でもあり、それを支えるボールドウィンとラフォンテーヌの思想的前提は公共善（public good）の追求であったといわれている（Saul 2010：xiii, 16）。

異なる地域や民族の協力というこのアイデアは、1867年の国家結成以降も、潜在的な地域間・民族間対立を抱える国内の均衡維持を目的として、保守党と自由党によって踏襲され、政党内、また、それが構成する内閣の構成にも反映されることとなった。つまり、カナダの伝統的な二政党が「ナショナル」な政治主体としての意義を主張する根拠が、責任政府成立の歴史に裏付けられているといえる。この点は、オーストラリアにおける責任政府の成立過程、ひいては政党政治のあり方とは性格を異にするものである。

次に、カナダの政党組織の制度的な側面を見た場合には、政党の支持基盤が地域的に分断された状況にあっても、自由党と保守党が引き続き「ナショナル」な政党であることを掲げ、次期連邦選挙で支持基盤の回復を狙いうる根拠がそこにはある。それというのも、カナダの自由党と保守党は、連邦レベルと州レベルで強固に組織化されておらず、同じ政党名を持ちながらも、連邦と州とでは別組織として機能している。したがって、州と連邦をまたぐ政治家としてのキャリア形成がなされないことも特徴である（Carty and Cross 2010：198）。政党政治研究者ローランド・K・カーティは、こうしたカナダの政党組織のあり方をフランチャイズに見立てている（Carty 2015：63-65）。つまり、政策案の骨子は政党コーカスを中心となって定めるにしても、候補者の選定は各地域で展開される政党組織が自律的に行う。したがって、基本的には、政策面と人事面で分業体制がとられてきたのである⁽¹⁹⁾。

本稿の検討との関係で重要であるのは、自由党と保守党がもともとイデオロギー政党ではなかったことから、有権者の政党帰属意識が弱く、さらに、この緩やかな政党組織のもとでは、彼らの支持が流動化しやすいという点である。そのため、自由党や保守党がある選挙で特定の地域の支持を大きく失ったとしても、後の選挙でそれを回復することは可能である。例えば、1950年代のジョン・ディーフェンベーカーの進歩保守党、1980年代のブライアン・

マルルーニーの進歩保守党、そして2015年のジャスティン・トルドーの自由党は、カナダ全域で議席を獲得し、それまでの選挙地図を大きく塗り替えたことで広く知られている。こうした歴史的経験が示すように、第三党の台頭と政党政治の地域的な分断化により、両党が「ナショナル」であることに実質的な限界を抱えながらも、その後の選挙で真に「ナショナル」な党としての回帰を目指しうろ根拠が、カナダの政党組織構造に存在するといえる。

そうした事情から、カナダの自由党と保守党は、たとえ一旦は少数派政権を樹立することになったとしても、次期選挙で単独多数派政権に転じられるという信念を持っていることが指摘されている (LeDuc 2009: 130)。実際に、同じ党が少数派政権を経て単独多数派政権の樹立に成功した例もカナダでは多く存在する。また、政権の存続期間が通常2年未満となる少数派政権のもとでは、法律の生産性が概して低くなるのは事実である。しかしながら、1960年代のレスター・ピアソン自由党少数派政権下では、社会福祉関連の重要法案が多数成立したのもまた事実である。それを可能にしたのは、議会内のあらゆる利益や意見を取り込み、政策的妥協を生み出すというピアソンのリーダーシップであり、彼の政権運営には高い評価が与えられている (English 2003; MacDonald 2003)。

このように、少数派政権であってもその運営に成功した例、また、少数派政権が頻繁に形成される点を踏まえて、近年のカナダ政治研究は、少数派政権との建設的な付き合い方を考える方向に向かっている。実際にカナダの政治学者ピーター・ラッセルは、少なくとも得票率で過半数に満たない政党が形成する多数派政権よりも、政策形成において多様な利益への配慮を要する少数派政権の方が民主主義にかなうと主張している (Russell 2009: 143)。これは、少数派政権が生み出す一種のコンセンサス型の政治と見ることができよう。さらに彼は、少数派政権のもとでは、議会の相対的な影響力が強められ、権限が強化されつつある首相や首相府の影響力に歯止めをかけることができる点を肯定的にとらえている (Russell 2008: 101-102)。このように少数派政権を肯定視する見方は、実は多党化の始まった1920年代にも存在した。当時、連立を拒否して少数派政権を形成した自由党の党首マッケンジー・キングは、単独多数派政権のもとでは、政府が国民の利益を害して暴走する恐れがあるものの、少数派政権のもとでは、議会での妥協が求められるという点で、後者を肯定的にとらえていたのである (Forsey 1964: 4)。

2015年連邦選挙でも例えば緑の党が、国民はどの政党に対しても完全な政治的コントロールを与えることを望んでいない点を挙げ、「現行の選挙制度では、少数派政権が国家にとって最良の形態である」との見方を示している⁽²⁰⁾。この考え方は、上記ラッセルやキングの考えに通ずるものであり、カナダでは時代を超えて、また、政界と社会の双方で、少数派政権の肯定的な部分に目を向ける姿勢が存在するといえる。

おわりに

上記検討を踏まえた本稿の主張は以下の通りである。デュヴェルジェの法則から逸脱した多党制のもとで生まれるカナダの政党政治像とは、「ナショナル」な政治主体であることをめぐり争う、デュヴェルジェ的政党政治の希求である。それを支える根拠は、19世紀半ばの責任政府成立以来の政党政治のあり方、また、フランチャイズに特徴づけられる緩やかな政党組織にある。この、「ナショナル」であることを主張し追求するデュヴェルジェ的政党政治の希求においては、一般的には政権運営に支障をきたすとして忌避される少数派政権の可能性を排除できない。しかし、カナダでは、この少数派政権でさえも政権形態の一規範となっており、今日ではそれとイかに付き合うかということがむしろ積極的に議論されるようになってきている。さらに、少数派政権のもとでは、議会において政策的妥協が求められるという点で、一種のコンセンサス型の民主主義として肯定的にとらえる見方も歴史的になされてきたのである。

民主主義のモデルを考えた場合、アレンド・レイブハルトの研究では、カナダは政府・政党次元において多数決型の民主主義に分類される。しかし、「ナショナル」であることをめぐり争うデュヴェルジェ的政党政治の希求からは、むしろコンセンサス型に近い民主主義が生まれるのではないかと考えられる。この点は、政策形成過程の検討が必要になるため、今後の課題としたい。また、本稿では自由党の検討が中心であったため、保守党についてもより長期的な視野で検討を進めていく必要がある。

2015年連邦選挙結果【獲得議席数（得票率）】合計：338議席

	自由党	保守党	新民主党	ケベック連合	緑の党	その他
ON	80 (44.8)	33 (35.0)	8 (16.6)	0 (0)	0 (2.9)	0 (0.5)
QC	40 (35.7)	12 (16.7)	16 (25.4)	10 (19.3)	0 (2.3)	0 (0.6)
NS	11 (61.9)	0 (17.9)	0 (16.4)	0 (0)	0 (3.4)	0 (0.3)
NB	10 (51.6)	0 (25.3)	0 (18.3)	0 (0)	0 (4.6)	0 (0.1)
PE	4 (58.3)	0 (19.3)	0 (16.0)	0 (0)	0 (6.0)	0 (0)
NL	7 (64.5)	0 (10.3)	0 (21.0)	0 (0)	0 (1.1)	0 (2.9)
MB	7 (44.6)	5 (37.3)	2 (13.8)	0 (0)	0 (3.2)	0 (0.6)
SK	1 (23.9)	10 (48.5)	3 (25.1)	0 (0)	0 (2.1)	0 (0.4)
AB	4 (24.6)	29 (59.5)	1 (11.6)	0 (0)	0 (2.5)	0 (1.6)
BC	17 (35.2)	10 (30.0)	14 (25.9)	0 (0)	1 (8.2)	0 (1.1)
YT	1 (53.6)	0 (24.0)	0 (19.5)	0 (0)	0 (2.9)	0 (0)
NU	1 (47.2)	0 (24.8)	0 (26.5)	0 (0)	0 (1.5)	0 (0)
NT	1 (48.3)	0 (18.0)	0 (30.8)	0 (0)	0 (2.8)	0 (0)
合計	184 (39.5)	99 (31.9)	44 (19.7)	10 (4.7)	1 (3.4)	0 (0.5)

ON：オンタリオ州
 QC：ケベック州
 NS：ノヴァ・スコシア州
 NB：ニュー・ブランズウィック州
 PE：プリンス・エドワード・アイランド州
 NL：ニューファンドランド・アンド・ラブラドル州
 MB：マニトバ州
 SK：サスカチュワン州
 AB：アルバータ州
 BC：ブリティッシュ・コロンビア州
 YT：ユーコン準州
 NU：ヌナブット準州
 NT：ノースウェスト準州

Election Canada にもとづき筆者作成。

* 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・若手研究(B)「多数決型民主主義国家における妥協の政治——20世紀前半のカナダにおける連邦政治過程」(代表：高野麻衣子)の研究成果の一部である。

〈注〉

- (1) カナダにおける多党化の始まりは、1921年の連邦選挙である。第一次世界大戦後に拡大した地域間の経済格差に対する人々の不満を背景に、1920年にはカナダの西部で同地域の農業利益を代表する第三党、すなわち進歩党(Progressive Party)が形成された。同党は1926年の連邦選挙までに勢力を大きく後退させたものの、初めて候補者を擁立した1921年の連邦選挙では自由党に次いで第二党になるほど躍進した。また、カナダにおける党首選の始まりは20世紀前半とイギリスよりも早く、そのきっかけは、政党コーカスで選任した党首のもとで戦った選挙で敗北したことや、党内の議員構成に地域的な偏りが生じ、代表の欠如を党大会で補う必要性が生じていたことである(Courtney 1973: 59-81)。このようにカナダの政党政治では、各地域、また、そこに含まれる民族を党内でバランスよく代表させることに重きが置かれてきた。
- (2) 進歩保守党(1942-2003)は現保守党の前身である。財政赤字や、現行憲法を批准していないケベック州を懐柔する目的で進歩保守党政権において進められた憲法改正の頓挫により、西部では民主主義改革や新自由主義を掲げて登場した改革党(Reform Party)、ケベックでは同州の主権を唱えるケベック連合が支持を集めるようになった。
- (3) 保守党(進歩保守党)も1867年の連邦結成以来、あらゆる地域での支持獲得をねらい、例えば1950年代、1980年代の連邦選挙では、カナダ全域の支持を取り込むことに成功している。しかし、進歩保守党が2003年に西部の右派政党と合併し保守党を形成して以来、イデオロギー的に右寄りになったのは事実である。とはいえ、2015年の連邦選挙ではそうした政治に対して有権者が変化を求めたのもまた事実であり、保守党がイデオロギー色を弱めた伝統的な性格に回帰するのかどうかは、今後、より長期的な検討が必要となる。そのため、本稿での検討は、まずは自由党を中心とする。
- (4) 当時も、責任政府の実現は政党政治の成立として理解すべきとの認識がなされていた。*Examiner*, August 14, 1844.
- (5) 高関税政策による国内産業の育成、西部開拓と移民誘致を軸とする「ナショナル・ポリシー(National Policy)」が展開された。
- (6) 地域代表大臣については、Bakvis (1991) また、自由党のマッケンジー・キング首相の閣僚ポスト配分については、Gibson (1966) が詳しい。
- (7) “The 1993 Election Changed Everything,” *Globe and Mail*, September 6, 2012, accessed

Sept. 29, 2017, <http://www.theglobeandmail.com/opinion/the-1993-election-changed-every-thing/article4348871/>.

- (8) King Papers, c22972, reel C-1970, Library and Archives Canada.
- (9) 1917年の戦時ユニオン内閣は、複数の政党による連立政権ではなく、保守党政権に一部の自由党議員が加わる形で形成された連合政権である。
- (10) ギリシアへ向かっていたシリア難民の小型ボートが転覆し、2015年9月2日にトルコの海岸において遺体で発見されたアイラン・クルディ君一家の最終目的地がカナダであったことが公になり、カナダ国内では難民受け入れの是非や規模が盛んに議論されるようになった。
- (11) “Justin Trudeau Made ‘Dangerous’ Move in Rejecting NDP Coalition,” *Vancouver Sun*, July 22, 2015, accessed Sept. 29, 2017, <http://www.vancouversun.com/news/justin+trudeau+made+dangerous+move+rejecting+coalition/11238253/story.html>.
- (12) “‘We Need to Kick-Start Growth’: Justin Trudeau Sits Down with Lisa LaFlamme,” CTV News, accessed Sept. 29, 2017, <http://www.ctvnews.ca/politics/we-need-to-kick-start-growth-justin-trudeau-sits-down-with-lisa-laflamme-1.2610550>.
- (13) “Coalition Government Could Be Possible, but Party Leaders Are Divided,” CBC News, accessed Sept. 29, 2017, <http://www.cbc.ca/news/politics/canada-election-2015-majority-liberal-regional-narrative-1.3279126>.
- (14) “Justin Trudeau: ‘I Will Be the Prime Minister of All Canadians,’” CBC News, accessed Sept. 29, 2017, <http://www.cbc.ca/news/politics/canada-election-2015-trudeau-liberal-major-1.3278681>.
- (15) “The Trudeau Cabinet,” *Globe and Mail*, accessed Sept. 29, 2017, <http://www.theglobeandmail.com/news/politics/the-trudeau-cabinet-read-the-full-list-ofministers/article27095965>.
- (16) 2015年の連邦選挙結果は本文末の表を参照されたい。
- (17) ボールドウィンがラフォンテーヌに宛てた手紙の中で、民族の問題を政治の中心に据えるべきではないとの考え方を確認している(«Il n'est pas question de race.» (Aubin 2002 : 25)。
- (18) ボールドウィンの伝記の著者マイケル・クロスは、この時代に彼が築き上げたイギリス系とフランス系の改革派の同盟は、カナダという国家の本質 (the essence of nationhood) になったと述べている (Cross 2012 : 4)。
- (19) ただし、近年は各地域の政党組織が政策案の決定に対する関与を求めるようになり、政策と人事の分業体制に特徴づけられてきたフランチャイズのあり方が崩れつつある点も指摘されている (Carty 2015 : 68-72)。
- (20) “Justin Trudeau Made ‘Dangerous’ Move in Rejecting NDP Coalition.” *Vancouver Sun*, July 23, 2015, accessed Sept. 29, 2017, <http://www.vancouversun.com/news/justin+trudeau+made+dangerous+move+rejecting+coalition/11238253/story.html>.

参考文献

【一次資料】

Aubin, George. 2002. *Louis-Hippolyte La Fontaine correspondance générale: les ficelles du pouvoir, correspondance entre Louis-Hippolyte La Fontaine et Robert Baldwin, 1840-1854*. Montréal: Les Éditions Varia.

CBC News (<http://www.cbc.ca/news>) accessed Sept. 29, 2017.

CTB News (<http://www.ctvnews.ca/>) accessed Sept. 29, 2017.

Election Canada (<http://www.elections.ca/home.aspx>) accessed Sept. 29, 2017.

Examiner (Toronto)

Globe and Mail (Toronto)

King, William Lyon Mackenzie, Papers. Library and Archives Canada.

Vancouver Sun

【二次資料】

加藤普章 (2002) 『カナダ連邦政治 — 多様性と統一への模索』 東京大学出版会。

小暮健太郎 (2002) 「政党システム変化と地域主義 — 1990 年代のカナダ総選挙結果を中心に」 『カナダ研究年報』 第 22 号, 19-34 頁。

新川敏光 (2006) 「カナダ連邦政治と国家統合 — その持続と変容」 『法学論叢』 第 158 卷, 第 5・6 号, 148-179 頁。

高野麻衣子 (2015) 「多党化時代の政党カルテル — 1920 年代カナダにおける進歩党の出現と二大政党」 『日本比較政治学会年報 (政党政治とデモクラシーの現在)』 第 17 号, 79-100 頁。

細川道久 (2014) 『カナダの自立と北大西洋世界 — 英米関係と民族問題』 刀水書房。

待鳥聡史 (2015) 『政党システムと政党組織』 東京大学出版会。

宮畑建志 (2007) 「イギリス二大政党の党首選出手続き — 手続きの民主化と党首の地位防衛」 『レファレンス』 第 57 卷, 第 9 号, 127-149 頁。

Bakvis, Herman. 1991. *Regional Ministers: Power and Influence in the Canadian Cabinet*. Toronto: University of Toronto Press.

Brodie, Janine and Jane Jenson. 2007. "Piercing the Smokescreen: Stability and Change in Brokerage Politics," In *Canadian Parties in Transition*, eds. Alain-G. Gagnon and A. Brian Tanguay. Peterborough: Broadview Press, 33-53.

Carty, R. Kenneth. 1992. "Three Canadian Party Systems." In *Canadian Political Party Systems: A Reader*, ed. R. Kenneth Carty. Peterborough: Broadview Press, 563-586.

_____. 2015. *Big Tent Politics: The Liberal Party's Long Mastery of Canada's Public Life*. Vancouver: University of British Columbia Press.

Carty, R. Kenneth, and William Cross. 2010. "Political Parties and the Practice of Brokerage Politics." In *The Oxford Handbook of Canadian Politics*, eds. John C. Courtney and David E. Smith. New York: Oxford University Press, 191-207.

Carty, R. Kenneth, William Cross, and Lisa Young. 2002. "A New Canadian Party System." In *Political Parties, Representation, and Electoral Democracy in Canada*, ed. William Cross. Don Mills: Oxford University Press, 15-36.

Courtney, John C. 1973. *The Selection of National Party Leaders in Canada*. Toronto: Macmillan.

Cross, Michael S. 2012. *A Biography of Robert Baldwin: The Morning-Star of Memory*. Don Mills: Oxford University Press.

English, John. 2003. "Pearson: Amiable but Ambitious, He Governed in Chaos and Confusion, yet Left a Legacy of Unequalled Achievement." *Policy Option* (June).

Forsey, Eugene. 1964. "The Problem of Minority Government in Canada." *The Canadian Journal of Economics and Political Science* 30(1) : 1-11.

Gibson, Frederick W. ed. 1966. *Cabinet Formation and Bicultural Relations: Seven Case Studies*. Ottawa: Information Canada.

Hirst, John. 2002. *Australia's Democracy: A Short History*. St. Leonards: Allen & Unwin.

Hodgetts, J., W. McCloskey, R. Whitaker, and V. Wilson. 1972. *The Biography of an Institution: The Civil Service Commission of Canada 1908-1967*. Montreal: McGill-Queen's University Press.

Jones, Benjamin T. 2014. *Republicanism and Responsible Government: The Shaping of Democracy*

- in Australia and Canada*. Montreal: McGill-Queens University Press.
- LeDuc, Lawrence. 2007. "Realignment and Dealignment in Canadian Federal Politics." In *Canadian Parties in Transition*, eds. Alain-G. Gagnon and A. Brian Tanguay. Peterborough: Broadview Press, 163–177.
- _____. 2009. "Coalition Government: When It Happens, How It Works." In *Parliamentary Democracy in Crisis*, eds. Peter H. Russell and Lorne Sossin. Toronto: University of Toronto Press.
- Lijphart, Arend. 2012. *Patterns of Democracy: Government Forms and Performance in Thirty-Six Countries, 2nd ed.* New Haven: Yale University Press. 粕谷祐子・菊池啓一訳 (2014) 『民主主義対民主主義 — 多数決型とコンセンサス型の36カ国比較研究 第2版』勁草書房。
- MacDonald, L. Ian. 2003. "The Best Prime Minister of the Last 50 Years: Pearson, by a Landslide." *Policy Options* (June).
- Patten, Steve. 2007. "The Evolution of the Canadian Party System." In *Canadian Parties in Transition*, eds. Alain-G. Gagnon and A. Brian Tanguay. Peterborough: Broadview Press, 55–81.
- Russell, Peter H. 2008. *Two Cheers for Minority Government: The Evolution of Canadian Parliamentary Democracy*. Toronto: Emond Montgomery.
- _____. 2009. "Learning to Live with Minority Parliaments." In *Parliamentary Democracy in Crisis*, eds. Peter H. Russell and Lorne Sossin. Toronto: University of Toronto Press.
- Saul, John Ralston. 2010. *Louis-Hippolyte LaFontaine and Robert Baldwin*. Toronto: Penguin Canada.
- Savoie, Donald. 1999. *Governing from the Centre: The Concentration of Power in Canadian Politics*. Toronto: University of Toronto Press.
- Siegfried, André. 1992. "Party Politics in Canada," In *Canadian Political Party Systems: A Reader*, ed. Roland K. Carty. Peterborough: Broadview Press, 18–44.
- Smith, David E. 1985. "Party Government, Representation and National Integration in Canada." In *Party Government and Regional Representation in Canada*, ed. Peter Aucoin. Toronto: University of Toronto Press.
- _____. 1992. "Party Government in Canada." In *Canadian Political Party Systems: A Reader*, ed. R. Kenneth Carty. Peterborough: Broadview Press, 531–562.
- Strøm, Kaare. 1990. *Minority Government and Majority Rule*. New York: Cambridge University Press.
- Underhill, Frank H. 1974. *Canadian Political Parties*. Ottawa: Canadian Historical Association.
- White, Graham. 2005. *Cabinets and First Ministers*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Woolcott, Angela. 2015. *Settler Society in the Australian Colonies: Self-Government and Imperial Culture*. New York: Oxford University Press.

Being “National” under the Multi-Party System in Canada

Maiko Takano

Canada has been classified as a counter-example to the political theory “Duverger’s law,” which posits that a single-member plurality electoral system (SMP) tends to produce a two-party system. In fact, a multi-party system appeared after the federal election of 1921. A regional protest party challenged the existing Liberal Party and Conservative Party, resulting in winning the second largest seats in the House of Commons. Particularly, the 1993 federal election marked a turning point in the history of Canadian politics. Canada saw an emergence of two regionally based parties, and the status of the largest opposition was consecutively occupied by third parties.

Since that election, scholars of Canadian party politics have focused on and explained the aspect of change in the party system, party organization, party representation, and electoral campaign strategies. Interestingly, however, if we look at the traditional Liberal Party and Progressive Conservative Party (today’s Conservative Party), we can acknowledge that they have continuously emphasized on being “national” in their representation; that is, the party should secure support from every region of the country, even after the politicization of a regional cleavage in the 1993 federal election. Being “national” has been their political tenet since the Canadian Confederation of 1867, for it is believed as a means of “national unity” in the country with highly distinctive regions.

With a focus on the aspect of continuity in the traditional two parties, the sole governing parties so far, this article aims to delineate the nature of Canadian party politics, which is unfolded under the undeniable multi-party system. As mentioned above, Canada is a deviation from Duverger’s law; paradoxically however, we can empirically observe that the traditional two parties have pursued a return to a two-party system regardless of its feasibility. That is demonstrated by the fact that there is an absence of coalition government, but there are many minority governments in Canada as the traditional two parties have persisted in being “national” on their own and not accepted third parties as a coalition partner after the election. In sum, Canadian party politics can be regarded as a pursuit of one that Duverger’s law generally assumes.